

# 首都圏方言若年層の音声の変種

久野 マリ子  
(國學院大學)

## 1. 首都圏方言の大学生が話している音声の実態

首都圏方言の実態を示す事象を把握しやすい大学生の話しことばについて報告する。

丁寧ではないくだけた会話の場面で首都圏方言の大学生が話していることばに、観察される現象をみていく。首都圏出身の学生達の多くは、自分は共通語・標準語の話し手であるを意識している。彼らの話し方は、伝統的地域方言を受け継がず、埼玉や千葉や埼玉に住んでいる移住者2世、3世で、1世の親が話す学習した共通語を母方言にしている。そのため、共通語や標準語の話し方がどのようなものであるかは自覚的ではない。

次に、首都圏方言の大学生の音声と若者語の実態の一部を報告する。

平成24年25年4～6月に國學院大學で調査した。平成24年度の調査では、学生は222人。内訳は東京42、埼玉41、神奈川33、千葉25である。あとは、栃木12、静岡7、長野5、北海道4、茨城4、広島4。平成25年どの調査でもほとんどの学生の生育地が首都圏であるのが特徴である。調査方法は久野担当のクラスでアンケートを実施した。設問に対して該当する形式を選択し、該当しなければ自由記述にしてもらった。学生はほとんどが1、2年生で、3年生、4年生も含む。専攻は経済、法学、文学、人間開発、神道文化の全学部。

## 2. 調査項目

音声的变化は語毎の個別の変化ではなく、音環境が揃えば一斉に変化するという性質がある。ここでの調査項目は、個人差やつかの間の流行や臨時的な語の変化ではなく多くの学生に見られる変異事象と思われる項目を選んだ。

## 3. 結果

### 3.1 「雰囲気」をフィンキと発音するかどうか。フィンキが間違いであると気づいたのはいつか。小学生の時か、中学生の時か、高校生の時か、大学生の時か。

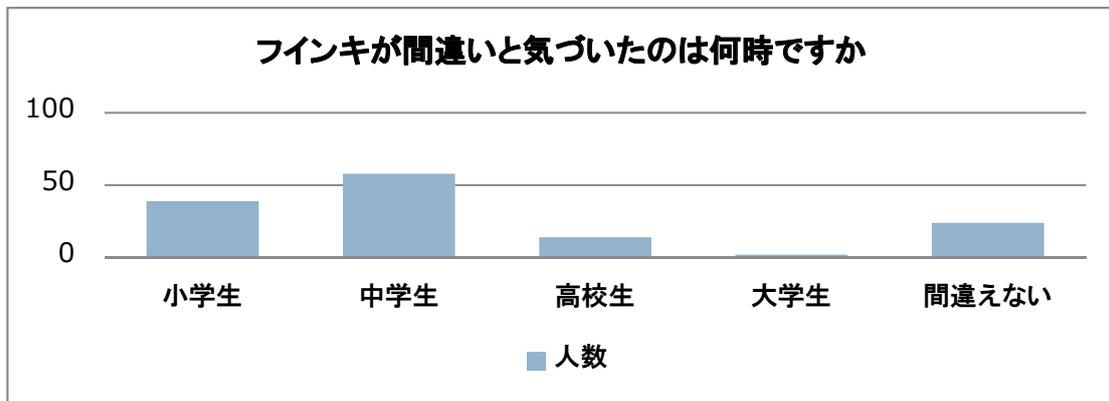
「雰囲気」を「フィンキ」と発音する事象が指摘されている。関西の研究者は関西の新しい方言だとする報告をしている。携帯電話やワープロの変換でも最近の機種では「ふいんき」と入力しても雰囲気(ふんいき)の誤りとして、正しい漢字表記が現れるし、携帯電話では「ふいんき」「ふんいき」どちらの入力でも「雰囲気」と変換される。

グラフ1からも明らかなように、首都圏の若年層ではほとんどの学生が「雰囲気」を「フィンキ」と言っていたことがわかる。小学生、中学生の時に気づいた学生が多いのは漢字を学習することによって、フィンキをフンイキに引き戻したと解釈される。

「雰囲気」を「ふいんき」と発音する現象は小田原方言の老年層では認められないから、こ

の現象は新たに起こった日本語音声の変異であることがわかる。

ここで注意したいのは、「ふいんき」と間違っただけでないと答えた学生がかなりの数であることである。音声変化が一斉に起こるという予測からすれば、この変化はまだ語的な変化の段階にあるのかもしれない。同じ環境での語例調査が必要である。

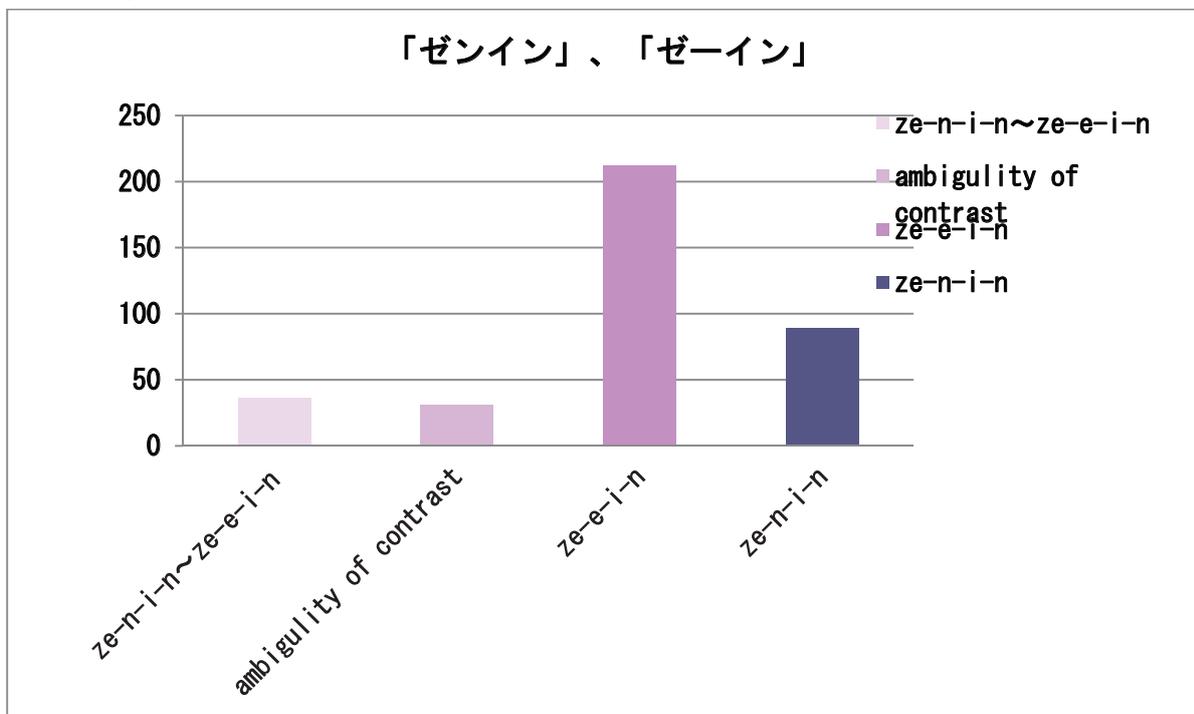


グラフ1 フインキが間違いと気づいた時期

### 3. 2 「全員」「原因」を「ゼーイン」「ゲーイン」と発音するか

次がグラフ2である。

「雰囲気」を「フインキ」と発音する事象は、撥音と母音イが連続する環境である。類似の環境で、全員を「ゼーイン」という発音を聞くことが増えているので、この事例について調査した。



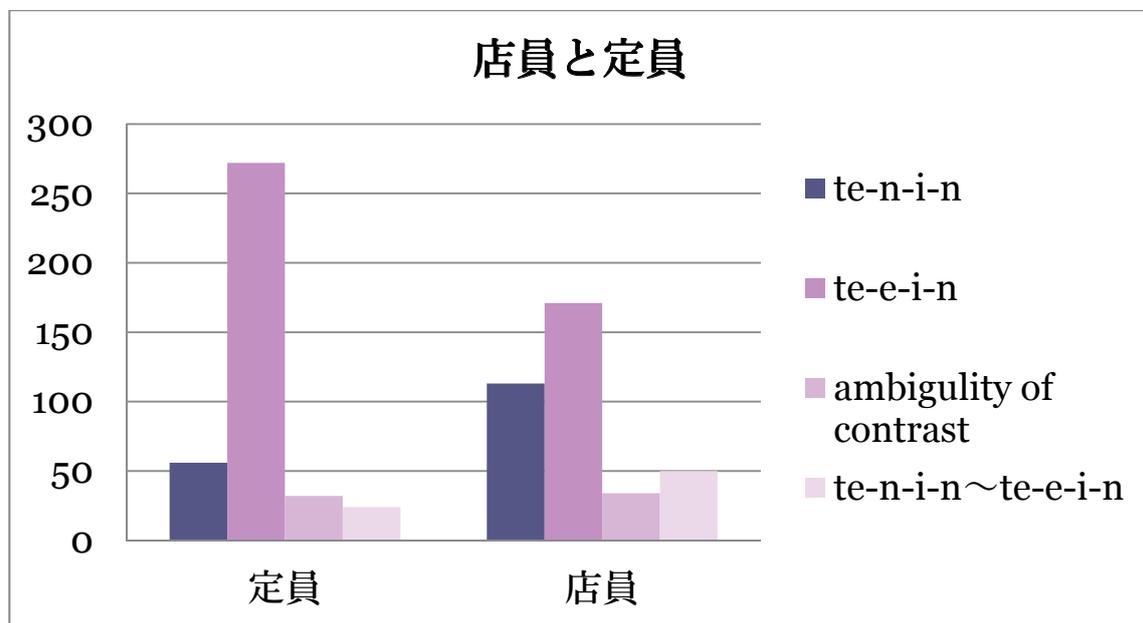
グラフ2 「全員」（ゼンイン・ゼーイン）

多くの学生が「全員」を「ゼーイン」と発音していることがわかる。やはり「ゼーイン」とは言わないと答えている学生がいる。この語の場合、学生にとって、ミニマルペアとなる語「税印」「鯨飲」などが使用語彙ではない。調査の時、なじみ度に注意する必要があった。

### 3.3 「定員」と「店員」

「定員」「店員」について、発音が異なっているかを調べた。グラフ3である。

この語は第2拍目が長音か撥音かで対立する語である。どちらの語も学生にとって馴染み度は高いが、「定員」も「店員」も同じ音に発音すると答えた学生が多くいることがわかる。「店員」は「テンイン」よりも「テーイン」と解答した学生の方が多い。撥音よりも長音のほうが優勢である。それが、グラフ3である。

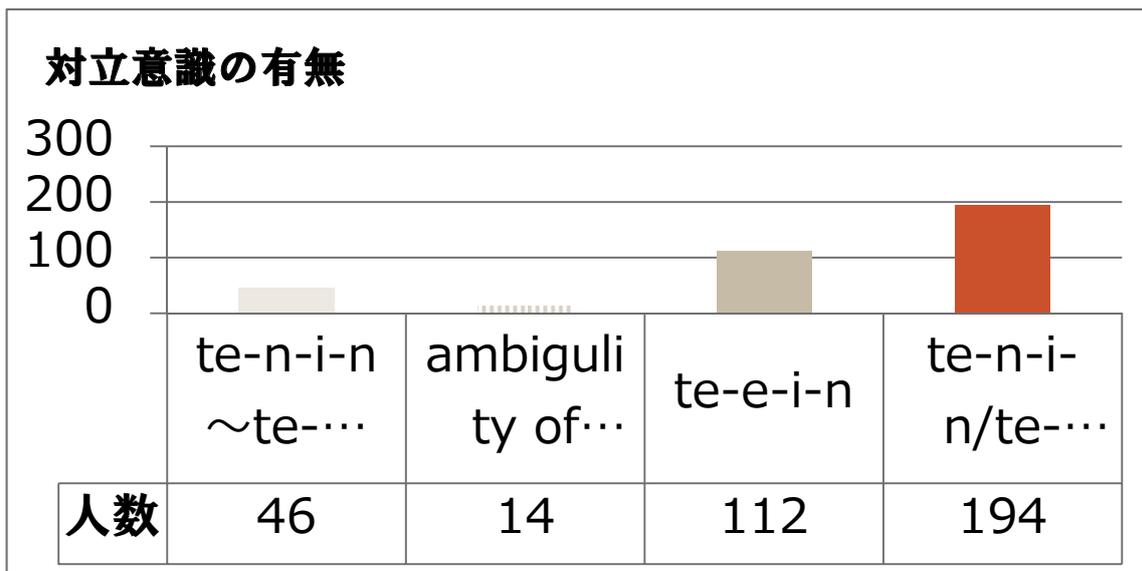


グラフ3 「店員」と「定員」

次に「店員」と「定員」が同じ発音だと自覚しているかどうかを聞いた。それが、グラフ4である。

グラフ4から、「定員」も「店員」も同じように発音していると答えた学生が112名いることがわかる。一方、二つの語を違う音であると意識している学生は194名と最も多い。しかし、どちらも発音が混ざると答えた学生が46名いることから、この二つの語が同じ音かあるいはユレルと意識している学生が多いことがわかる。

少数であるが14名はあまりその差がはっきりしないという学生がいる。

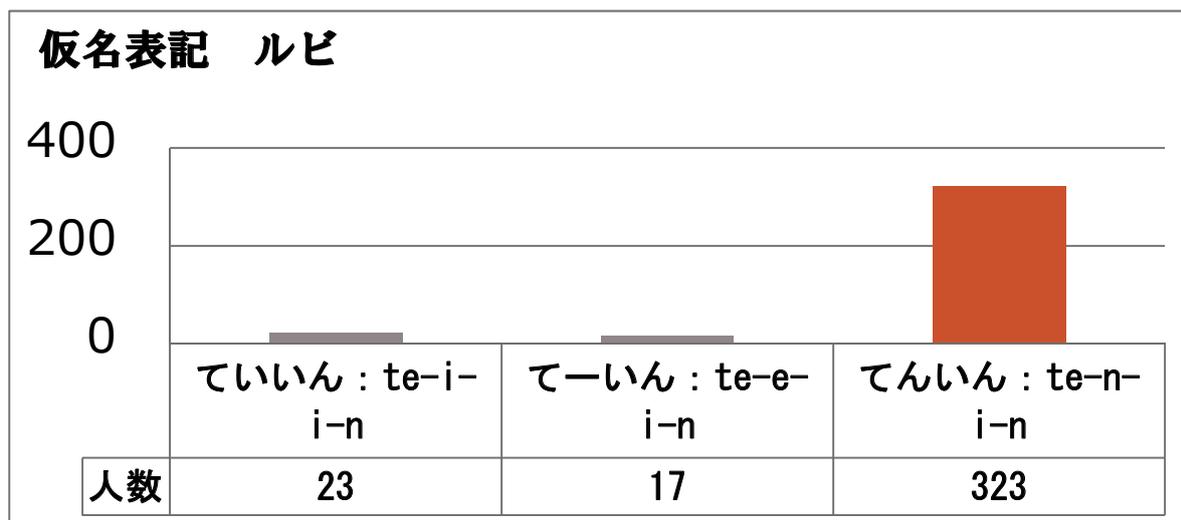


グラフ4 「定員」と「店員」の対立意識

それでは、同じように発音しているという学生が多い中、音韻対立としての意識が薄れているかどうかを調べたのが、**グラフ5**である。

「店員」に読み仮名のルビを質問した。大多数の学生が「ていいん」と正しくルビをつけている。40名の学生が「定員」と同じ仮名を書いている。

このことから発音では「定員」「店員」は同じように発音しているが、第2拍目がそれぞれ異なる文字であることはまだ意識されている。音声と文字の意識の変化に差が見られる例である。学生の中には、発音は同じだが、「は」と書いて「ワ」と読むのと同じような仮名遣いの問題と捉えているというコメントを書いた学生もいた。



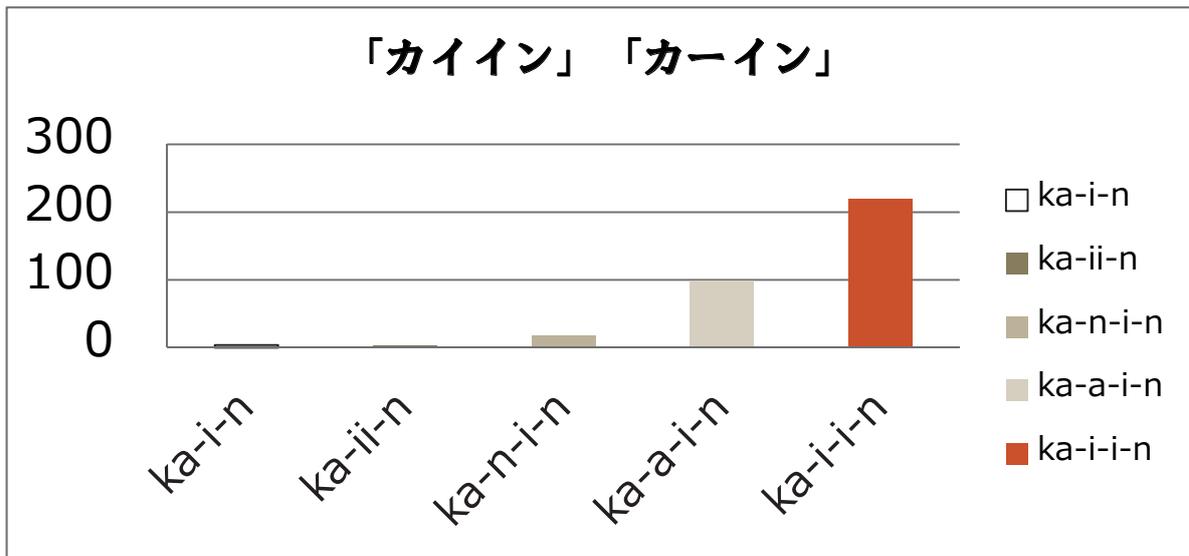
グラフ5 「店員」の読み仮名のルビ

### 3. 4 「会員」

以下、第2拍目がイと長音で対立する語について調査した。

「会員」という語で、アイの連母音のイが融合して長音化する例である。グラフ6

伝統的東京方言のように第2拍目が融合して、ケーインとなると答えた学生はいない。アイの連母音が融合してアーに発音する学生がかなりいることが分かる。ただ、第2拍と第3拍の音声の表記に苦労している回答が多かった。融合しかけているか、融合しても伝統的な首都圏方言の連母音の融合とは異なるアーに融合する例が多いことがわかる。アイの連母音がエーになる方言の他にアーになる方言は、十津川村方言とか、出雲方言に報告があるが、関東方言では珍しい。

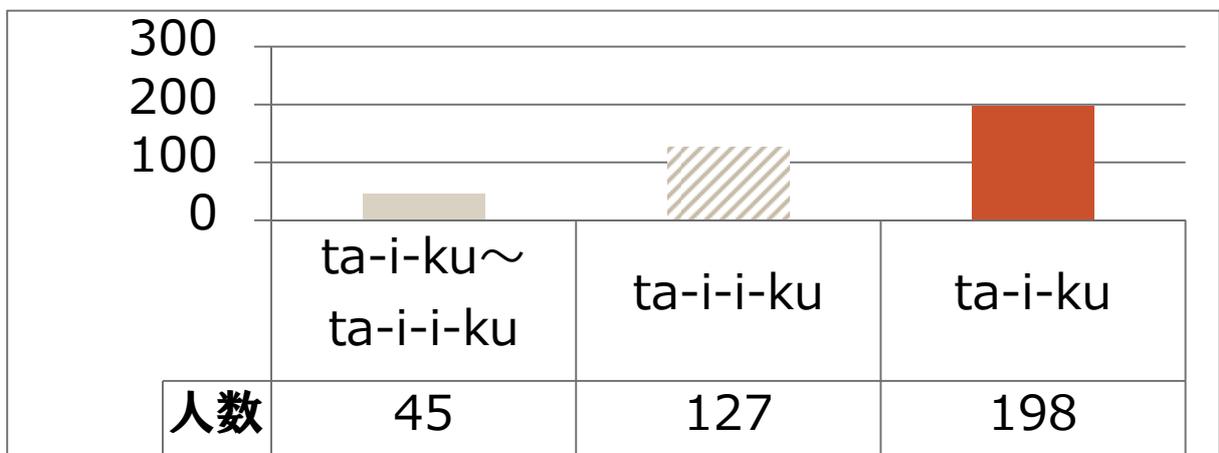


グラフ6 「会員」(カイイン・カーイン)

### 3. 5 「体育」「女王」

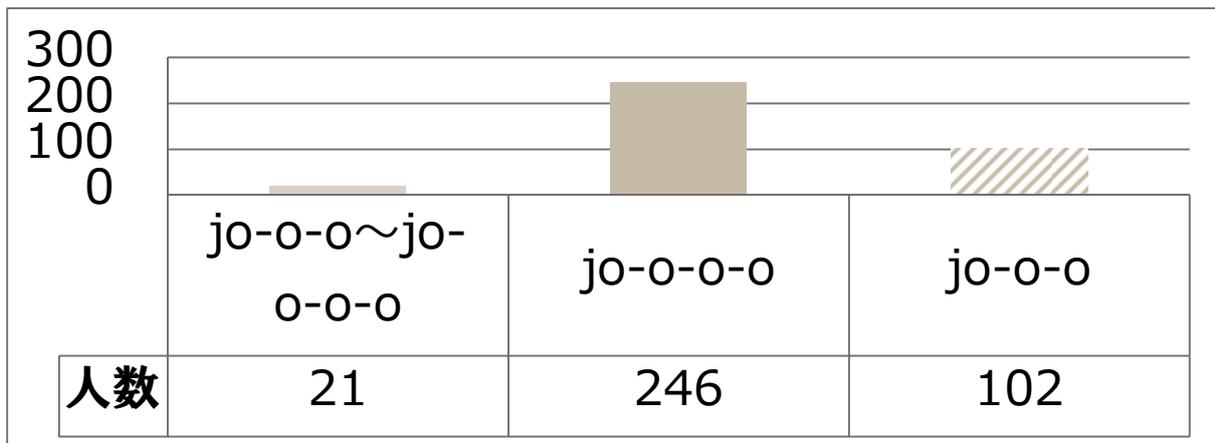
次に東京にある気づかない音声特徴をみていく。

グラフ7は「体育」をタイクというかタイイクと言うかのグラフである。



グラフ7 「体育」(タイク・タイイク)

グラフ8は「女王」を、「ジョオウ」というか「ジョオオウ」というかのグラフである。



グラフ8 「女王」(ジョオウ・ジョオオウ)

いずれも、「タイク」「ジョーオー」が最も多い。伝統的東京方言では、「タイク」「ジョーオー」が優勢で、自覚されないまま首都圏方言に受け継がれている例である。この事象は首都圏の若年層だけでなく、小田原方言の高年層にも優勢であることから、かつて広く関東方言で優勢であった事象であることが推測される。

#### 4. この調査からわかること

以上述べてきたように、首都圏方言の若年層に音声変化がみられる。その現象は、個別ごとの語毎の音変化ではなく広がっていることが予測される。つまり、第2拍が撥音、次がイ母音の語において4拍以上の語の語中の撥音と長音の対立が薄れ、中和現象を起こしていることである。母音がイ以外の語においても緩やかではあるがそのような現象が起きていることが予測されるが今後の課題である。このような中和の現象は、撥音+母音、撥音+いが目立つが、撥音+母音であれば発音上は対立がないと答える学生も少数であるがいる。さらに、この変化は日本語全体に広がっている可能性があるが、これも今後の課題としたい。

#### 参考文献

- 秋永一枝ほか(2007)『東京都のことば』明治書院。
- 井上史雄編(1983)『《新方言》と《言葉の乱れ》に関する社会言語学的研究』(昭和56・57年度 文部省科学研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書)。
- 大島一郎・久野マリ子(1991)「東京都の言語実態」佐藤亮一編『東京語音声の諸相』(1)(文部省重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴：東京都(及び放送関係者)における音声の収集と研究」研究代表者・杉藤美代子 研究成果刊行書)。
- 大島一郎・久野マリ子(1993)「東京都の言語実態の諸相」佐藤亮一編『東京語音声の諸相』(3)(文部省重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴：東京都(及び放

送関係者)における音声の収集と研究」研究代表者・杉藤美代子 研究成果刊行書).

- 亀井孝・河野六郎・千野栄一編著 (1996)『言語学大辞典 第6巻』三省堂.
- 木川行央・久野マリ子 (2012)「神奈川県小田原市方言におけるラ行音の撥音化」『Scientific approaches to language 11』神田外語大学.
- 国広哲弥・中本正智 (1984)『東京語のゆれ調査報告』(文部省科学研究費特定研究「言語の標準化」総括班).
- 久野マリ子編 (2009)『首都圏方言の研究』國學院大學大学院文学研究科.
- 久野マリ子編 (2010-2013)『首都圏方言の研究』(1) - (4) 國學院大學大学院文学研究科久野研究室.
- 久野マリ子・木川行央 (2012)「神奈川県小田原市方言におけるいくつかの音声現象の動向」『言語科学研究：神田外語大学大学院紀要 18』神田外語大学.
- 國學院大學日本文化研究所編 (1995)『東京語のゆくえ』東京堂.
- 斎藤純男 (2006)『日本語音声学入門【改訂版】』三省堂.
- ジェフリー・K・プラム、ウィリアム・A・ラデュサー著、土田滋、福井玲、中川裕訳 (2003)『世界音声記号辞典』三省堂.
- 東京都教育委員会編 (1986)『東京都言語地図』東京都教育委員会.
- 日本音声学会 (1976)『音声学大辞典』三修社.